大正新教育と芸術教育運動の思想

——片上伸の文芸教育論を中心として——

川瀬八洲夫

Taisho New Education and Educational Movement through Art

——Concerning with Noburu Katagami's "Bungei Kyoikuron"——

Yasuo KAWASE

論文抄録

大正期における広汎な政治，社会，市民的諸運動，いわゆる，大正デモクラシーを背景に一連の新教育運動が展開された。新教育運動は外来の教育思想の受容や八大教育主張，私立の新学校の形成，芸術教育などを包含しつつ展開された。芸術教育運動はいわゆる教育のアウトサイダー達（文学者，美術家，音楽家など）の手によって「赤い鳥」運動，自由画教育運動として，公教育，学校教育では見られない内容とレベルを有していた。片上伸は文芸教育論として，その芸術教育論を主張したが，これは彼の文学観，人間観，社会，労働観，婦人解放論，児童自由画教育論などとの関連のうちに主張され，独自な教育理論として論じられたものであり，広く教育界に影響を及ぼしたものであった。

1. はじめに

1910年代の後半から1920年代にかけて広汎な民衆の政治的，社会的，そして市民的自由獲得のための諸運動が展開された。憲政擁護運動，普選運動，生活擁護斗争を軸に諸運動のバネになった米騒動，さらには生存権，ストライキ権，団結権などをかかげ，組織的労働運動をすすめた友愛会の成立。吉野作造の唱導から大正デモクラシーの一つの思想的代表となる〝民本主義〟，婦人解放運動としての青鞜社活動，人道主義的な文学運動の白樺派の活動，さらには人権の社会的底辺への拡大としての水平社運動等々の民主的諸運動，思想などとしてデモクラシー運動が昂揚した。こうした一連の運動，思想は明治絶対主義，専制主義下の様々なイデオロギー，伝統的な封建的〝忠孝〟イデオロギーを基軸とした道徳思想，思惟様式，人間諸関係に対峙しようとするものであった。また日清，日露戦争以後急速に資本主義的発展は進み，帝国主義化していくのであるが，これらに対応して社会的諸文化も急速に多様化し，殊に新聞，雑誌，ラジオを中心とするマス・メデイアは飛躍的に膨張化し，加わえて第一次世界大戦後の民主的傾向，ロシア革命の成功等の世界史的背景を得て，デモクラテイックな展開が一層活発化し，新しい社会的体質への変化を告げることになる。しかし，こうした諸運動，思想にも複雑な矛盾が内在していたが，それにもかかわらず，思想的実践，運動組織のし方には多くの民主的所産を生み出したし，またそれらは明治絶対主義，専制主義

への抵抗と新しい地平を開くものであった。

こうした諸運動，思想を背景に展開された大正新教育の思想は数々の外来教育思想（E. Key, J. Dewey, W. Kilpatrick, H. Parkhurst, G. Kerschensteiner, P. Natorp etc,）の受容を一つの媒介に，さらには定型的天皇制公教育にあき足らず，独自なカリキュラム，教育方法，学級，学校組織をもとに私立の新学校を設立して児童中心主義の自由主義的な教育の組織実践。八大教育主張の展開。また直接学校教育には参与しない芸術家達を中心に企てられ，実践された芸術教育運動などにその特徴を観る。これら大正新教育の歴史的役割は，よしんばそれが帝国主義的発展の文化的多様化に呼応して生まれたものとして批判される性格はあるにしても，天皇制公教育に方法論的に対峙しつつ，子どもの自主性，自己活動，個性の発現，創造性の開発をうながそうとした諸契機は意味深いものであった。吉田氏が「近代的な教育の目的に沿って，方法的な自覚にとりくんだ，わが国最初の教育思想であった」と評価した[1]ことと関連する。たしかに学習の内容，カリキュラム，学校組織等の制約をはなれて，本来的に自由な学習が展開されることは至難なことではあるが，定型的公教育の画一性，形式性から，子どもの感性，感情，表現，活動の自由をまず獲得しようとしたことの歴史的意味は大きい。なかでも，公教育体制のなかでの不徹底さをつきつめて，本質的な人間的自由，人間精神の解放を求めて，また人間の基本的諸権利に基づいた児童観と，子どもの自発性，創造性，個性，抑圧された子どもの精神，諸特性の解放をおしすすめようとしたのは一連の芸術教育の思想，運動において強く見られる。

山本鼎の「児童自由画」教育運動は子どもの感性，感情，魂の表出とその表現の自由さを求めて，定型的教育内容たる「臨本」と対決し，巾広い「児童自由画」教育運動をおしすすめ，その理論，実践を一般化し，ついには「臨本」教育の廃止へと進展せしめたものであった。また「赤い鳥」は公教育のおしすすめ得ぬ領域に，多くの芸術家を参集せしめて，巾広い芸術教育運動を展開し，多くの歴史的遺産を残したものであった。こうした芸術教育運動の思想は新教育の他の分野での児童観，教育内容，実践などの諸分野の不徹底さをつきつめていき，それをより深く，人間性の本質から，その解放と前進の礎にし，明治的天皇制公教育へのきびし批判的教育運動としたものであった。

2. 大正芸術教育の思想と片上伸

本来芸術は権威や模倣や，既成道徳や因習，さらには社会制度，家族制度，政治組織等々の矛盾からもたらされる諸々の桎梏を越えて人間の本性を追求することを本質としてしいよう。近代のリアリズム芸術は殊にそうであろう。リアリズム芸術は，前近代的な人間諸関係——社会的諸制度に関連して——道徳，慣習風俗，人間的愛情，神，宗教，政治，イデオロギーその他諸々のタブーに挑戦して，人間の赤裸々な，真正の姿を追求してきた。特に文学はその役割として重要な課題をになってきたのである。日本の近代文学の歴史も，坪内消遥，二葉亭四迷以来，「自我」の追求，「個性」の発見，「家」と「個人」との宿命的葛藤，自己の内部生命の燃焼——我をいかに生かすか——，また労働，政治と人間解放をと追いつづけてきた。明治後期の自然主義文学，大正期を灌がいする白樺派の文学，そして大正末期から昭和初年代にかけてのプロレタリア文学などがそうであった。また明治天皇制国家（家族制度国家）の確立とともに，その体制下における国家—社会—家—個人のイデオロギーと個々のあつれきを，すぐれた文学者は鋭敏にそれを促えて苦悩したのであった。北村透谷，木下尚江，石川啄木，有島武郎などはその代表であった。彼らは明治天皇制国家の体制的重圧を主体的に受けとめ，ここからいかに人間精神を解放すべきか，を求めて苦闘したもの

であった。本稿で主たるテーマで論じる片上伸は，こうした文学運動，すなわち自然主義文学からプロレタリア文学への理論家として，文学芸術と――人間，社会，労働，婦人解放，道徳，そして教育との問題を多様な視点から取りあげ，その解明と実践的方策を提示し，強い影響を与えた思想家であった。

1918（大正7）年7月，鈴木三重吉によって創刊された「赤い鳥」は重要なエポックをなしたものであった。1936（昭和11）年の10月号まで全巻196冊の果した歴史的役割は創刊時の契機と状況，ジャンル，影響力，歴史的遺産などからみて，まさに画期的なものであった。童話，童謡，童謡歌，綴方，児童自由詩，童話劇，児童自由画など，それぞれのジャンルに独創と個性と自由な魂をもって子どもの世界へと入りこみ，子どもの自由な精神解放の端緒となり，その指導性を発揮したことの意味は大きい。創刊のいきさつとその抱負については，発刊直前に配布された「童話と童謡を創作する最初の文学的運動」に明らかにされているところである。この雑誌を商業主義に毒されないようにするために，会員制発行としたが，その賛同者には，森林太郎，泉鏡花，高浜虚子，徳田秋声，島崎藤村，北原白秋，小川末明，小宮豊隆，野川臼川，野上弥生子，有島生馬，芥川竜之介などの著名な芸術家が集まっていた。「童話と童謡……」の趣旨を要約して，毎号「赤い鳥の標榜語」として掲げたのであった。この雑誌から数多くの傑作が生まれ，多くの本格的童話，童謡，歌，詩などが誕生したのは周知のことである。この「赤い鳥」などの芸術教育運動発生の契機は明治的定型的公教育のありきたりの方向，国定教科書を中心にした定型的公教育の注入主義の悪弊を端的に示す唱歌，図画，綴方，詩歌などの批判として出されたものであった。あるいは商業主義，俗悪主義的児童文化への批判としてであった。人間道徳を形骸化し，いたずらに従順卑屈な人間形成論を主張していた修身道徳の批判からであった。

「赤い鳥」で三百二十篇余の詩―自作の総数の三分の一近くに当たる―を発表し，児童自由詩の確立と指導とに当った北原白秋は，「芸術自由教育」誌で「児童自由詩について」「小学唱歌々詞批判」などを発表し，公教育内容をきびしく糾弾したものであった。彼は「小学唱歌々詞批判」の冒頭で「私は確心する。今日，日本の小学唱歌はその根本に於て一大革新を要する。で無ければ日本の児童はその詩若くはその音楽の方面に於て真に救はれる道が無いのだ。詩，絵画，音楽，此の三つの芸術が児童の美的情操を薫養する上に於て，無論何よりも必須なる可きであるが……中略……此の根本の芸術教育があらゆる真と善との涵養をもただ一つに包含して，初めてその真の使命を果すのである。全体である。先づ，児童を真のいい児童として真に生かしきる事である。芸術教育の提唱がここでその光輝を放つ」[2] と主張して，以下，具体的例をあげて，公教育内容をはげしく批判したものであった。

また，山本鼎も公教育の権威性，模倣性，形式性をきびしく指弾し，子どもの本性にのっとってリアルな思想で実践さるべきことを主張し，「自由画教育はリアリズムに建っている。絵画史上のリアリズムではなく，ただ，各々の眼で見よ，各人の霊で観よ，各人の趣味で統べよ，といふ哲学的リアリズムだ。それだから，私は先ず第一番に，お手本を否定し，モチイブを無条限に広くしたのである」[3] と述べ，さらに子どもの特質にしたがって，実践さるべきことを強調し，「子供には子供の感情，智慧，生活があります。彼れらが描かうとするに当っては各自の印象，感覚，認識，観念，等に捉へられる彼れらのリアールがあります。眼と手のある児なら其処に表現が指命されて，彼れらの美術が生れ得るわけじやありませんか」[4] と主張するのであった。

白秋にしても，山本にしても定型的公教育の教授内容，教授法の権威に挑戦し，子どもの認識，観念，表現の自由を求め，創造の精神を人間感情の解放の必要性を主張するものであった。

3. 片上伸の教育思想

1) 文芸教育論と人間観

片上伸（1884～1928）は「文芸教育論」を主張した八大教育主張の論者として知られているが，他の論者達（樋口長市，河野清丸，手塚岸衛，千葉命吉，稲毛金七，及川平治，小原国芳など）とちがった異質の理論家であった。彼の文芸教育論は，狭義の文学教授論ではなく，鋭く教育全般の諸矛盾をついたものであり，人間の本性の発現をどうとらえ，どう実践するかという人間（人生）の根源的諸問題にとり組んだものであった。公教育の矛盾，道徳性教育，人間論，婦人解放論，文芸の本質と社会，政治，自然，労働の諸問題，文芸教育活動――特に自由画教育運動――などの諸問題へと矛先を向けたものであった。

すでにふれたように，芸術教育運動は，「赤い鳥」運動や「児童自由画」教育運動によって端緒が開かれ，1921（大正10）年ころをピークとして，「赤い鳥」は東京を中心に全国的に，また，「自由画教育」運動は長野県に始まり，全国的にその理論と実践をもって影響力を及ぼし，画期的な教育運動になったものであっ。片上はこの教育運動に深いかかわり合いをもち，特に「児童自由画」教育運動には，その運動の心からの協賛者として，また実践的運動にも深くかかわったものであった。「児童自由画」教育運動の理論家であり，創始者，組織者であった山本鼎とは，片上のロシア留学時代（片上の第一回ロシア留学時，1915年10月～1918年７月）からの実懇の友であり実践的同志でもあった。彼らは他の助力者たちの賛同を得て，日本児童自由画協会（更に発展させて後は日本自由教育協会）を組織し，機関雑誌「芸術自由教育」を発刊し（1921年１月の創刊）この雑誌をもって，自由な教育創造と，子どもの創造的教育活動の契機をつくり，定型的公教育へのきびしい批判とその実践を展開したものであった。

片上の理論は鋭く，その向けられた対象は広かった。彼は1928（昭和３）年３月，大正末期より日本のプロレタリア文学運動に理論的根拠を与えることに専念しながら健筆をふるっている時期に45才の若さで他界したのであった。この間二回ロシアに留学（第一回は前述の通り，第二回は1924年６月から翌1925年10月まで）し，ロシア文学研究に多大な功績を残したのである。彼は最初{1908（明治41）年の２月，３月ころ}は自然主義文学の擁護者としての文芸批評から活動を始めた。ついで，早稲田大学派遣留学生として，当時のロシアに留学，レニングラード（当時のペトログラード）モスクワを中心に滞在し，帰国後，1920（大正９）年創設された早稲田大学ロシア文学科の主任教授となって，研究，教授，文芸批評の活動を展開する。ロシア滞在中，ロシアの文化，自然，風土，民族性の鋭い観察をなし，イプセン，トルストイ，ドストエスキーなどを中心にロシア文学研究に精励したのであった。帰国後，ロシアで形成された思想，感覚を基に，デモクラシーの問題，ロシアの民族性，ロシア革命における民衆，ボリシェヴィキ，民衆芸術，文芸批評の本質，ロシアにおける文学教育運動の諸問題をテーマにしながら，1919（大正８）年５月，「ロシアの現実」（至文堂），「思想の勝利」（天佑社），７月「草の芽」（南北社）などを公刊，以後，数々の諸論文を発表，個の生命の燃焼，文芸批評，芸術運動，修身道徳教育，公教育，災害と文学，婦人解放，プロレタリアートと芸術，あるいはプロレタリア文学理論の諸問題などに力を注いだのであった。そして，1922（大正11）年に至って「文芸教育論」をまとめ，1924（大正13）年６月に早稲田大学を退職し，ロシアに二度目の留学，翌年10月に帰国し，その後は主にプロレタリア文学運動の理論形成に意を注ぎ，「文学評論」{1927（昭和３）年新潮社}を出版したのであった。

片上の文芸教育論の主張は狭いワクにとじこもっての理論ではない。教育の根源としての，人間

性発現の教育，道徳性確立，自由で創造的な全体的人間形成の教育論として考えたものであった。「文芸教育論」の序文で，まずこの点を明らかにする。文芸教育の本旨は文芸の精神による人間の教育であると。そして「文芸教育が，文学，絵画，音楽，舞踊，演劇などの形によって行はれることを期待すると同時に，必ずしもそれ等の形にあらはれない文芸的精神が，たとへば数学その他諸学科の形の上にも流れ溢れて来べきことを期待する。それが広く道徳教育に帰趨すべきことは勿論である」と主張し，結局文芸教育は技術の問題ではなくして生活態度及至覚悟の問題であるとする。彼はつねに人間を形式や徳目をならべ立てて理解し，教育しようとすることに反対する。あくまでもトータルな存在として，全体的に見ようとし，人生は交響曲のようなものである，と主張している[5]。深遠で，包含的で，全体的な人間が特定の徳目に基づいて教育されること，特別の職業的実用的レベルで教育がなされることに反対した。当時の修身倫理の教科の実際は人間の道徳生活をその外面的結果の方面から，小刻みにして，それぞの部局的の標準を立て，そのあらゆる標準を羅列しているにすぎないといい[6]，また，小学校から大学に至るまで，専ら実用的，しかも卑近の意味に於いての実用的効果を等一の目的にしているし，また今日の教育は殆んど，皆それぞれの方面における一種の職業教育であって，その真髄中心を逸している[7]と批判するように，彼には当時の公教育における一面性が子どもの全体的発達をスポイルすると断じていたのである。それゆえ実用的教育，修身教育の形式性，徳目性，一面性を強く批判していたものであった。こうした一面性を救うこと，人間の全体的精神発達をすすめること，これが彼の文芸教育論の主張でもあった。彼は，くり返し主張するのであるが，文芸教育論の根本的基礎的立場は人間的立場，人間の本性から考えて，人間の本性を生かそうとするものに外ならないという[8]。文芸教育の〝文芸〟とは，いかなる断片的な生活をも包含的に，集中的に，綜合的に観て，あますところのない真実の生命を表現するものであり，いっさいの人間生活の意欲を抑殺せずして，総てを十分に生かすことによって根本の生活を強く逞しくすることを意味している[9]。

片上は文芸にしても，文芸批評にしても，無限の生命の発現，自由で総合的な創造的な精神の発揚を，その根本としていた。だから文芸評論は人間の内なる力，生命の力に対する模索，要求，研究としての創造的活動である[10]とされる。その根本的批評精神も現実生活の矛盾と虚偽とを摘発すると同時に，またそれ以上に進んで，現実生活に於いて蔽はれ匿され，埋められている生命の心髄，生命の力をも認めてこれを現わしてくれるものでなければならない[11]ものである。現実にはさまざまな諸条件によって，人間性の発現，内部生命の燃焼が抑圧されていることに深い憤りをもつものであった。殊に公教育としての学校教育にそのような事態の浸潤していることに深い憂慮を示し，そこからどう脱出できるかということが，彼にとって焦眉の課題になる。彼は公教育内容，修身，歴史，国語科をはじめとする諸教科のきびしい批判をくり返すのであった。1921（大正10）年3月に発表した「文芸教育論の弁」で「在来の修身倫理の教科も，国語，絵画，音楽，歴史などの教科も，所詮謂はゆる〝適当な機会や刺戟〟として供せられていたものに外ならない。しかも，少くとも在来及至現行の教育に於いて，修身倫理乃至文学美術方面の教科か，—即ち謂はゆる年少子弟の生活の創造と統制とのために最も中心の力となるべきもの，最も適当な有力な機会と刺戟とを提供すべき筈のものが，事実はその本来の性質と反対に，甚だ無力な無効果なものに，虐待せられ圧迫せられ，もしくは閉却せられ溷濁せしめられているのを見て，その事実を指摘し，その事実を一掃して，真に力あり生命あるものにしようといふのが，私の文芸教育論の根本の出発点」[12]であると述べて，現実教育への批判としているのであった。さらに自己の主張する文芸教育論は，うわついた単なる感情教育ではなく，人間の道徳的生活に対して最も微妙な，甚深な，根本的永久

的な感化を有するものなのである。この力によって教育の根本的綜合的な事業が成し遂げられなければならないのだと主張する。

2） 文芸教育論と公教育批判

片上は真の教育―文芸教育―は人間精神の，無限の生命の，現実の桎梏からの解放であり，創造的な発展であると把握する。にも拘らず現実の教育はこれらの根本的精神と命題に背反すると観るのである。一面的で，偏狭で，形式的な公教育の内容と方法を指弾し，日本の教育は根本からその精神態度を改めなければならないとする。特にナショナリズムの教育(愛国心問題)，修身道徳の教育，文芸美術音楽の教育，実用主義の教育，そしてその形式性と閉鎖性，子どの諸々の自発性を抑圧する公教育，これらは全て弾劾の対象となる。愛国心問題。彼は「日本人の偏狭な一時的な，近視眼的な，とかくジンゴイステックになりがちな愛国心，あとは野となれ山となれ式の，勝ちさへすればよい式の，広い世界のことも遠い将来のことも考へないような，人間の，もしくは他国民の心理を全体的に考察するだけの力さへ有ってないような，いわゆる日本独特の愛国心の如きものは結局は教育の罪である」と批判する[14]。この稿を発表したのは，1920(大正9)年9月であるが，この時期にすでに，超国家主義へと昇華する基盤を見抜いていたというべきであろう。修身倫理(道徳）の教育についていえば，それは公教育では重大なものとして取り扱はれているにもかかわらず，実さいには最も退屈がられ軽んぜられ，しかも全く面白くないものとしてとらえられている。この教育は本来重要視されるべきものであるが，その内容実質が空虚であり，無力無生命であって，ただ徒らに滑稽と悲哀とを混へた深刻な侮蔑の感じをおのずから唆かすことになっている[15] と指摘し，更に修身倫理の実践とは，人間の生活を部分に色分けし，それぞれに規準を立て，人間の道徳生活を小刻みにして，それに合致しないものは不道徳なものだと断罪する。これは人間の本性と全体性，統一性にいかにそぐわないものかを指摘し，教育内容に「忠義」「孝行」「義勇」「情愛」「信義」などの徳目をあげ，実践されていることに深い憤りをもって例をあげつつ批判するのである[16]。当時の公教育の標準的内容として国定教科書をみてみると，修身（1918＝大正7年までは第二期国定教科書，同7年以降昭和に入るまで第三期が使われる）では，第二期，第三期通じて，国家，社会，家族，家，個人，等々の倫理道徳規範を徳目的に整理して入れ，第二期では，巻1から巻6までは総数157，第三期では同巻1から巻6までは，総数159を擁して教科が形成され，その徳目は国体，皇室，天皇，祝祭日，忠義等国家皇室に関する徳目，家，祖先，親の恩，孝行などを中心とする家族，家の徳目，そして規律，忍耐，勤倹，勇気，奉仕，謙遜，正直，礼儀，公正，博愛などの個人的徳目であった。また，歴史では（1920＝大正9年までは国定第二期で「尋常小学日本歴史」を使用，同年10月に第三期教科書「尋常小学国史」上巻が発行され，翌年12月に下巻が発行，1922＝大正11年から昭和に入るまで使用される）課の編成や教材の構成については人物主義の歴史であり，国体の観念を明確にすること，皇室，天皇の尊厳，治績，忠臣，逆臣などの教訓を中心に編成され第二期国定教科書では，巻一の天照大神，神武天皇，日本武尊から始まって第一次世界大戦後までを扱い，第三期でも同様，上巻の天照大神から始まって，下巻の欧州の大戦と我が国で終わっている。第二期では第一期より内容には人物を多くとり入れ，幼童期よりの数々の教訓話を入れ，倫理道徳性に力を入れているものであった。音楽（唱歌）では準国定教科書ともいうべき文部省編纂の国定教科書が使われ，（1918＝大正7年までは「尋常小学唱歌」同年以降昭和に入るまで「新訂尋常小学唱歌」が使用される。）国威，皇室，天皇，神道，忠孝，道徳をもったものを多く入れ，芸術性，子どもの発達や心理や興味に合うものより，徳性形成用の教課中心であった。

このような教育内容，道徳性中心の天皇制公教育は，当然自由な創造的な人間形成をのぞみ，個

性の発現と生命の完全な燃焼をのぞんだ片上にとって，批判の対象とされるのはけだし当然であった。また，教育が，人間の全体性形成の作用であるにもかかわらず，実際には実用を主眼とし，準備のための教育（職業と受験）になっている状況にも鋭い批判の矢を向け，「実際今の教育は，片面的，部分的，断片的に生活を取り扱ふ事に就いては，相応にもしくは寧ろ過分にさへも苦心しているようであるが，生活を包全的に集中的に綜合的に取り扱ふことに就いては，多くはその必要をさへ感じ得ていないばかりではなく，甚だしきはそれを有害とし危険とし尚早として排斥し禁止しようとさへしているのである[18]」と論じて，当時の教育の傾向を批判し，真の教育は「実に自づからにして人間の性情の豊富にせられ，深められ，強められるところに成り立つ」[19]ものであると述べ，人間形成の全体ということを教育の目的にしなければならないと主張しているのである。

3） 芸術と教育——文芸と人間，労働，婦人解放論をめぐって——

片上にとって芸術は人生，生活と抜きさし難く結びついている。芸術は生活をおし進める力，動く力であり，生活の創造のよろこびを与えるものなのである。新たな生活の統一を与えるものなのである。芸術は生活の成長，創造，統一の表現に外ならないものであり，旧い「全部」から新しい「全部」への移り行きの表現に外ならないものなのである[20]。こうした表現が芸術の本質であり，生命であるならば芸術はいつでも自由であらなければならない。創造は解放を意味し，創造は意志の自由を意味するものである。芸術は即ち必ず自由であるのを以て本質とするものなのである[21]。こうした自由と解放と創造を生命とする芸術は，芸術以外の目的のためにその本質に圧迫を加えることを許さないし，常に未来の理想によって生きるものであって，この意味で，芸術とは革命的なもの[22]なのである。芸術の対象（特にデモクラテックな芸術）は人間性の奥深くに向けられていて，単なる表面的，形式的な技巧や粉飾よりも人間性の本源に向うものとしてとらえられる。そのために芸術は常に人間の生活を高め，深め，清新ならしめるものでなければならない。近代の文芸はこうした芸術観に基礎を置くものであり，その対象は人間性の深奥に向けられ，力強い生命の力を愛する心をもたなければいけない。同時にその役割も，不安な寂莫な心持ちを伴いながらも力強い表現をもって因襲の打破，現実の暴露，幻影の破壊，強烈な自我の主張などの題目をもって展開されてきたりしたのであった[23]。近代の芸術・文学の本質は人間の本質へと迫り，それらを生活の統一として把握し，人間性の解放へと表現されるべきものしてとらえるのである。

文芸批評に精魂を傾けた片上にとって，人間の根源的な生命の力，この力に対する模索要求，現実生活に対する矛盾や虚偽を摘発すること，生命の心髄を発見していくことが，文芸批評の本質であると理解していた。だから彼にとって批評の自由のないところでは真実の生活，真実の生命が解らないし，真贋の区別がつかないし，不徳の欺瞞，暴虐と屈従とがあたりまえの世界になると断言する[24]。片上は人間性の根源とか，生命の統一とか，内面的深奥とか，人間存在は文響曲とか，さまざまにニュアンスを含んだ表現をする。では彼は人間存在をどう促えようとしたのだろうか。彼は自からの生命は自からが主宰者である。自からの生命の創造者，自己の無限の創造力，自己の人間の本性の力と光をと，自己の生命の灯し火を燃やせと，いろいろに言う[25]。これらのことの基本的な意味は個性の発現ということになろう。彼自身も，生命の力の無限であることいつさいの人生活動はその無限の生命の力の創造，即ち個性の確立に向けられるという[26]。彼の人間観は個性の確立に焦点が合わされ，そのために内部生命は可能なかぎり，全体的に，統一的に，自由に，創造的に，抑圧されることなく燃焼さるべきものと見なされる。それゆえに，形式的，部分的な，準備的，実用的な教育は拒否されてくるのである。文芸も，文芸批評もこうした内部生命の燃焼のための完全な表現を与えるものとして捉えられてくる。

片上は社会問題，災害，労働問題，民衆の諸問題にも積極的に関心を示している。彼は第一回のロシア留学中にロシア革命を経験し，ロシアの様々な民衆活動に直面し，理解する。そしてロシアの民衆の魂，ロシアの風土と雰囲気を理解する。ロシアの農民美術運動，児童創造画運動（日本では山本鼎が児童自由画と名づけた）に接し，その心を理解する。こうした運動に参加，あるいは組織するために山本鼎に力を貸し，児童自由画，農民美術運動に協賛参加する。そして，プロレタリア文学運動に賛同するのであった。彼は，デモクラシーの精神は，先づあらゆる人間のうちに，人間の本性を認めることである。而してまたその人間の本性を自由に自然に合理的に，公正に伸張充実めしめて，そこに人間の本性をして心ゆく思いを味なしめることだ[27]と主張する。

彼がこうした問題，運動に興味をもつのはそれらに人間とのかかわり合いにおいて人間的興味を発見し，もっているからである。それらが単に流行的題材であるからではないと主張する[28]のである。人間がその個性を燃焼させるにも，現実にはあまりに多くの障害と，欺瞞的諸条件があふれている。これら一つ一つに対決し，克服していかなければならない。真に個性の発現とそれを求めるためには，それをはばむ諸条件との対決を通さねばならないのである。

片上にとって，人間性解放のために特別に取り上げなければならなかったいま一つのテーマは婦人解放の問題であった。日本の歴史における婦女子への差別と蔑視を黙視することはできなかったのである。彼はロシア文学の研究のうちでも，ことに，イプセンやトルストイ研究を通じて，家や家族制度，愛の問題，婦人解放の問題に多くを費している。イプセンの「人形の家」に詳細の分析を加わえ，トルストイ論として，彼の家庭論，子女教育論，婦人解放論にメスをあてている。そして「イプセンやトルストイから力と光りとを得ねばならない位置に立っている」[29]等と論じて，婦人解放の問題に対決しなければならない客観的状況と自己の決意を明らかにしているものであった。この問題をぬきにして，真の人間性の解放の思想はあり得なかったのである。この点に関して「婦人解放と近代文学」{1920(大正9年)4月，7月} が公にされ，婦人解放の問題が明確に論じられているのである。それによれば，婦人解放の問題は，婦人の人間としての根本性に対する不合理不自然な圧迫強制を排斥して，婦人の本性の自由を主張するという精神から出発しているのだと述べ，それだからこの問題は文学の上でも最も重大な，また，最も興味の深い題材の一つとして扱はれるのは文学の本質からも，婦人解放運動の本質からも当然である。婦人解放は政治上の自由，経済上，職業上，教育上の自由は勿論のこと，更に恋愛結婚，家庭における自由と解放も含まれなければならないのである。しかし制度上，法律上，政治経済上等の自由だけでは，実現は不可能である。魂の自由の問題として論じ，この点から明らかにされなければどうにもならないのである。それに関連して「人形の家」のノラを克明に分析批評して，婦人解放の本質に迫ろうとしたものであった。片上の婦人解放の問題は人間性の解放，自我の確立，個性の発現という人間の問題として論じられ，特に封建的桎梏の多い「家」制度を中心にした封建的人間関係，現在的問題として把握され，提出された問題であったのである。

4) 児童自由画教育運動をめぐって

1919（大正8）年4月27，28日，長野県小県郡神川村（現長野県上田市）で，山本鼎，神川村の農民，山越修蔵，金井正，神川村小学校長岡崎，郡視学の岡村及び組合学校七校の校長を発起人として，「第一回児童自由画展覧会」が開かれた[30]。これは「赤い鳥」と並んで，大正期芸術教育運動の偉大な開始であった。この開催に先だって，山本鼎は開催の趣意書を配布していたが，それには，臨画教育の実際をきびしく批判し，その中で「美が，師伝にのみ培はれたら竟に随落です。将来の日本の美術，及美術工芸を，臨本と扮本とで仕上げたやうな旧式な美術家の手から全々取り

上げてしまう事は，吾々の任務なのです。一体小学校で，算術や地図と一しょに，文章，絵画，音楽等を教へるのは何のためでせう。—いうまでもなく，知識と併せて高尚な美の情操を涵養せんが為めです。人類が，皆，逞しい体力と，明快な容貌と，充分な知識と，適応した事業とを有ったとしたらすばらしいではありませんか。其上に，誰れもが，其情致に於て，詩人であり，美術家であり，音楽家であったりしたら，実に天国です。……要するに，人間は絶えず，産む事を育つ事を欲しています。其二つが極めて順潮に進展する処に，健やかな文化が建てらるるものと思はねばなりません」[31] としてその決意の程を示していた。片上はこの児童自由画教育運動に心から賛同を示し，それを積極的に支援したのであった。予定通り1919年4月27，28日は前述の神川小学校で，同年9月には長野県伊那郡竜丘村竜丘小学校で開かれ，以後それが全国に影響を及ぼすことになる。第一回の神川学校の時も東京からはせ参じた片上は，そこで「感情教育の現実及理想」と題して講演し，第二回の竜丘小の時にも「児童自由画と其背景」と題して講演し，この運動の意味と理論について主張し，この運動を盛り上げていったのである[32]。この後も同様に積極的な活動を進めていった。

神川小学校での第一回展覧会の大成功のうちに，その運動の組織化が進められ，同年7月に「日本児童自由画協会」が設立されたが，最初の七会員の一人として，参加し，さらに翌年12月には同協会を「日本自由教育協会」へと発展させ，翌1921（大正10）年1月には，山本鼎，北原白秋，岸辺福雄ら合計四人で編纂委員となり，機関雑誌「芸術自由教育」を発刊，芸術教育運動の発展に尽したのであった。さて片上は，この運動の児童自由画の意味と理論について，まず，子どもの〝臨本〟によらない，自由画は何よりも児童の生活興味の表現の解放を意味し，またひろく人間の衷心の本性の解放を意味する[33] ものである。したがって，児童が描くとき，それは自分自身のための描写，創作であり，自分自身の喜びの情に駆られ，自分自身の喜びのために創作する。没功利的で，誠実で，真実に，自由に，自然に，何の躊躇もなく，ありのままの喜びを表現するものである[34]。それゆえに児童自由画の意義は，単に世間普通にいうような児童の感情教育，美的教育の範囲にとどまらせるのでない。また児童に絵画を愛せしめ，その方面で特色ある創作をなさせることに止まるものではない。その根底，究極において，人間の衷なる気分，真に人間らしい善良な正しい感情を，どこまでも尊しとするところに在らなければならない。感情を抑圧し，虐殺することではなく自己の衷心を披瀝し，主張する自信と，自由不覇の精神とを培育することにある[35] と主張するのである。神川小学校での展覧会を見て「第一回児童自由画展覧会を観て」という小文を発表しているが，そのなかで，幾度も見てまわった。見てまわる度によい絵を発見した。見て行くたびに，よいもの，新しいもの，美しいもの，真実なもの，自由な生命のあるものを見出したと言い，そして，いい絵は年少の，腕白者の，野放図の子どものものに多く，年長で，成績がよく，お手本式の絵は，馴らされて，小ぎれいではあるが，自信のない，だめなものだと述べているが，こうしたところに，自由で，活動的で，自然で，誠実なほうが，どんなに人間の本性の表現にかない，人間性の解放と個性，創造性の発現に参与し得るものであるかを率直に述べているのである。

かくして児童自由画教育の意味，意義を明らかにし，その一般化，普遍化の必要性を確信するのであった。そして積極的にこの運動の推進者，助力者とし活動するのであった。

4. 結　び　に

以上　大正新教育の特質，芸術教育運動との関連のうちに，片上伸の文芸教育論の思想を，彼の文芸観，公教育観，人間論，婦人解放観，児童自由画教育運動などとの関連において考察してきた。

彼の思想は根底において自己の内に秘む内部生命，人間の本性の解放を求めて，自我の主張と個性の確立，人間の自然性，創造性，自由性の確立を求めてのものであった。これらの発現を疎外し，抑圧する封建的規範，形式的道徳，公的教育内容とその教育秩序，その理念へのきびしい批判を示したものであった。明治的公教育へのきびしい批判に基づいて，そこから自由で創造的な人間精神の解放の方法が示されなければ，本質的に自由な主体的な人間形成は望むべくもなかった。1916（明治43）年8月，明治的専制主義と，その公教育を批判して，石川啄木は「時代閉塞の現状」を発表して，われわれ青年を囲繞する空気は，今やもう少しも流動しなくなった。強権の勢力はあまねく国内に行き亘っている。見よわれわれは今どこに進むべき路を見出し得るか，と絶望的に論じたものであったが，こうした明治公教育組織及び内容との対決を経ずして，真の人間精神解放の教育はなし得なかったであろう。いわゆる大正新教育の主流もまた一面において，芸術教育運動もそうした点では真の人間解放のための諸契機は薄弱であった。こうした中で，文芸教育論を名うったにしても，いろいろなレベルから現実的に人間の魂の解放を求めて，明治的公教育に対決する独自な教育理論の形成をはかったのが片上伸であった。

註

1) 吉田昇「第一次新教育運動における思想研究の意義」教育学研究第34巻第1号 pp. 2～3
2) 北原白秋「小学唱歌々詞批判」(「芸術自由教育」大正10年11月号) p. 1
3) 山本鼎「自由画教育の使節「(大正10年9月「自由画教育」アルス刊 所収)
4) 山本鼎「いろいろな質問に」(「自由画教育」所収)
5), 6) 片上伸「文芸教育の提唱」(「文芸教育論」大正11年 文教書院 所収)
7) 片上伸「文芸教育の意義」(文芸教育論」所収)
8) 片上伸「文芸教育論の弁」(「文芸教育論」所収)
9) 片上伸「文芸による人間の教育」(「文芸教育論」所収)
10) 片上伸「文壇の風俗主義的傾向を排す」(「片上伸全集第二巻」(昭和14年所収 砂子屋書房以下「全集」とする) p. 140
11) 片上伸「現実を愛する心」(「全集」第一巻所収) p. 19
12) 同8)　13) 同9)
14) 片上伸「文芸精神の社会的語調」(「文芸教育論」所収)
15) 同14)　16) 同8)及び同9)　17) 同5)
18) 同14)　19) 同5)
20) 片上伸「自由批評の精神」(「思想の勝利」大正8年 天佑社 所収) pp. 181～2
21) 片上伸「自由，動力，解放」(「思想の勝利」所収49) pp. 144～5
22) 片上伸「民衆の威力及び芸術」(「思想の勝利」) p. 49
23) 片上伸「近代文学に対する疑い」(「全集第二巻」所収) p. 229
24) 片上伸「批評のない生活」(「思想の勝利」所収) p. 148
25) 片上伸」生みの力」(「全集第一」所収) p. 8
26) 片上伸「文学思潮の一転機」(「全集第二巻」所収) p. 142
27) 片上伸「思想の問題」(「思想の勝利」所収) p. 10
28) 片上伸「当来の文芸と社会問題」(「文芸教育論」所収)
29) 片上伸「薄明の中より」(「全集」第二巻所収) p. 186
30) 山本鼎「日本に於ける自由画教育運動」(「自由画教育」所収)
31) 山本鼎述「児童自由画展覧会趣意書」

32） 同30）
33） 片上伸「一人の力」（「文芸教育論」所収）
34） 片上伸「心感情の主張」（「文芸教育論」所収）
35） 同34）

注　当論稿は第33回　日本教育学会（教育史部会‥於広島大学）での発表の一部を構成加筆したものである。